

研究業績報告

Technical Report

今日の治療指針 1981年
TODAY'S THERAPY 1981
医学書院, 別刷

瀬野川病院

SENOGAWA HOSPITAL

覚醒剤中毒

Amphetamine Addiction

瀬野川病院院長 津久江 一郎

覚醒剤（メタンフェタミン）は戦後間もない昭和20年代後半にヒロポンと呼ばれて（ヒロポンは元来商品名であり、原義はギリシャ語でヒロポノス“仕事を好むこと”の意であるが、この注射を打てば疲労がポンととれると誤り解釈され、長く伝わっている。昨今、隠語では“シャブ”とか“ヒーヤイノ”ともいわれている）第一次の乱用期を経験したが、昭和26年の覚醒剤取締法の制定により、昭和31年にはほとんどの影をひそめていた。

ところが昭和49年頃より再びその数が増え始めたため、これを第二次乱用期と呼んで今日に至っており、由々しい社会問題にもなってきていている。

身体的主症状 主として肘関節内側部の静脈沿いの赤い点状の針痕（古くなると色素沈着をきたし、組織は硬化してケロイド状変化を見る）を認める他はあまり見るものなく、主症状は精神症状である。

確診はH.Jatzkewitz法で尿中より検出するが、これによると使用中止後約1週間は陽性に出る。

急性中毒期の症状 中枢神経刺激作用として、頭が冴え、落ちつけなくなり、決断が速くなり、気分が明るく大きく、いろいろな考えが湧き、口数も多くなる。しかし仕事のまとまりはかえって悪い。数時間で逆に身体はだるくなり、力の喪失を感じる。

慢性中毒期の症状 過敏、不安、不眠、食欲減退、易怒的の他、“誰かが自分の噂をしている”（関係妄想），“自分は狙われている”（被害

妄想）、“警察に監視されている”（注察妄想），“暴力団に追いかけられる”（追跡妄想），“妻が浮気をしている”（嫉妬妄想）とか、幻聴などの幻覚を体験するようになる。

以上のような病的体験は、ただ1回の使用でも発呈することもあるが、普通週2～3回数ヵ月間連用すると精神症状を発呈する例が多い（1回の使用量は耳かき1杯0.02gが平均使用量であるが、化学調味料、カフェイン、塩、乾燥剤などで希釈増量されているのが常であり、純度は著しく低く、肝障害をきたしやすい）。

付) フラッシュバックについて 覚醒剤1回の興奮は数時間で消失するが、常用者では興奮時にあった病的体験が、長い非使用期間を置いてもなお、再開ただ1回の使用とか飲酒などにより自動的に再現されることがある。

①幻覚、妄想に対する治療：覚醒剤中毒を含めて、薬物中毒に発呈する妄想の中で最も特徴的なものは、包囲攻撃妄想（囲まれて襲われるようにもう込む）である。

これらの病的体験に対しては、メジャートランキライザーを用いて著効がある。

処方例

1) コントミン	150 - 300mg
ヒベルナ	50 - 75mg
	分3 食間
2) セレネース	20 - 30mg
アキнетン	1 - 3mg
	分3 食間

なお、麻酔剤や睡眠剤を投与すると、かえって酩酊状態が強く現れることが多いので、用いない方が良い。

②向精神薬を投与すれば、大体1ヵ月以内で精神症状は急速に消退するが、一部には無為、感情鈍麻などの旧い分裂病様状態や躁うつ病様状態に移行する例もある。

また精神症状が消退しても、粗暴、軽薄、威嚇性などの性格（精神病質）特性を持っているので、これに対しては、マイナートランキライザーと集団精神療法の併用が有効である。

処方例

セルシン 30 - 60mg

分3 食間

[今日の治療指針1981年 231頁]

瀬 野 川 病 院
院 長 津 久 江 一 郎
〒739-03 広島市安芸区瀬野川町中野
電 話 (08289) 2 - 1055(代)

SENOGAWA HOSPITAL
Ichiro Tsukue (Director)
Nakano, Senogawa-cho,
Aki-ku, Hiroshima, Japan
〒739-03 Tel. (08289) 2-1055